
最高の片思い

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最高の片想い

【コード】
N5250C

【作者名】
三亜野 雪子

【あらすじ】
高校三年生、あと少ししかないときも想い続けるあの人のこと。
私と僕の片想い。

私

高校三年生の冬。

私は今、片想いをしています…。

ちらほらと降る白い雪。それはこの土地の寒さを証明している。

大きさに息を吐いて、白くなるのを面白がっている私。

勉強は嫌いだけど、学校は好き。

だって、あそこではあの人に逢えるから…。

「もうすぐ一年になるよお」

「しかもうちら卒業じゃん！告白しなよお」

私を心配する友達の言葉にいつも首を振る。

両想いになれたら。そういつも願ってしまつのは仕方ないよね。

だけど、私はもう片想いでいいの。私は今のままで、想うだけで充

分だから。

だって、告白しようとか、いつとか、そんなことばかり考えるのがもう嫌になっちゃったから。

そんなこと考えるくらいなら、あの人のこと考えているほうがとても幸せ。

三年生になる前にあの人のことが好きになった。

三年生、あの人と同じクラスになった。

すっごく幸せ。

休みの日、ちょっと不幸。だって見れないから。

話しかけられた日は胸いっぱい。その日は記念日に追加。

内緒である人の部活の試合を見に行く日はドキドキ。

一年、いつもあの人のこと考えた。

とっても幸せだった。

みんな、もうすぐ卒業だから告白しなと言っけれど、そんな逃げみ

たいなことしたくない。

両想いは無理だと言っておきながら、ちょっとだけ希望を持っている自分も嫌だったから。

だから、私は片想いのまま卒業するの。

三月、卒業式当日。

一人で学校を歩く。

みんな遊びに行っちゃった。だけど、名残惜なごりおしくて私はまだこの場所にいる。

最後に教室。すると、そこにはあの人が自分の机で居眠りをしていました。

心臓が止まりそうなほど驚いて、声を出しそうになった。

無邪気な顔。いつもその顔に憧れて、眺めてた。

終わり。

私の想いも、幸せな日々も、今日で終わり。

きつといい思い出になる。

たとえ片想いでもそれは今までに味わったことのない最高の片想い
だったから。

だから、ね？

これで最後だから…。

だから、許してね。

「好きだよ」

甘い甘い、触れるだけのキスをして、私は教室を出た。

一年間ずっと見てきて、勝手に想像して、あげくの果てには犯罪を犯してしまった。

ごめんね。

だけど、最後に割り切れることをしておかないと泣くこともできないから。

許してね。

春になって、温かくなっていく。

私の一年間続いた片想いは雪とともに消えて、水になる。

しよっぱいしよっぱい水になる。

ありがとう。

この気持ちをくれて、この想いをくれて、ありがとう。

一生忘れることのできない思い出を、ありがとう。

そして…

ちよじなら

僕

高校三年生の冬。

ずっと好きだった人がいる。

とりとめもなく降る雪はまるで今の僕の気持ちを表しているようで、少し切ない。

僕らはもうすぐ卒業する。

あの人に想いを寄せてから既に一年と半年。

三年に上がったら、一緒だったクラスは変わってしまった。

「おい！どうすんだよ！早く告うちまえよ！」

冗談まじりで友達に勧められるが、勇気が持てなくて結局言えなかった。

廊下ですれ違ふとき、声が聞こえたとき、いちいち心臓が高鳴る。

可愛い顔が印象的で、いつも元気な彼女の周りには人が集まってい

る。

片想いって、何だかアホらしい。

だけど、彼女のことを考えることのできる毎日が悪いものじゃない気がした。

もやもやと気持ち悪い日だってあるけど、それでも好きだから。

できることなら彼女も同じ気持ちであればいいのに。

三月、卒業式当日。

僕は今日、彼女に告白しようと思った。

片想いのままでもよかったけれど、それでもやっぱり彼女に僕の気持ちを知ってもらいたかったから。

式が終わった後、タイミングを見計らって彼女に告白した。

だけど……。

片想いつていうのはそのまま消えていくか、成就じゆうじゆするか、散ちつてしまつかどれかしかないんだってことを思い知った。

彼女にはもう彼氏がいたらしい。

両想いになれるなんて思っていなかったけど、それでもその言葉は苦しかった。

誰もいない教室で泣いて、泣いて、泣いて。

我ながら女々（めめ）しいと思うほどだ。

いつの間にか疲れて寝てしまった。

「好きだよ」

微かに聞こえてきた優しい声と、唇に感じたぬくもりで目を覚ました。

教室には誰もいない。

だけど、廊下に足音が響いて消えていった。

僕が彼女のことを想っていたように、誰かが僕のことを想っていてくれたんだ。

片想い、それは誰にもある気持ちで、誰にだって味わえる切ない気持ち。

だけど、もう僕にはない。

あの告白で全てを出してしまったから。

だから、終わり。

今日で、終わり。

この気持ちをくれてありがとう。

はっきり言ってくれてありがとう。

泣かせてくれてありがとう。

優しく、切なくて、苦しい想い出をありがとう。

そして…

ウツクシク

私と僕

あれから二年……………。

今日は同窓会。

見知った顔がたくさんいて、たくさん話した。

そのなかで、なぜか何度も目が合うあの人。

話をしているわけでもない、ただそこに視線がいつてしまう。

そうすると同じタイミングであの人もこっちを見る。

もう、感じないはずなのに。

もう、さようならをしたはずなのに。

なぜかその視線にドキドキしてしまっ。

あの声为谁なのかもわからないはずなのに。

確定できる証拠なんてないはずなのに。

なぜかあの人があのときの人だった気がして、ドキドキする。

時間はあっという間に過ぎて、もうすぐお開きの時間になった。

それでもあの人はまだ見ていて、落ち着かない。

顔が熱い、身体が動かない。

いつしか二人で見つめ合って、微笑んでいた。

さようなら。

そう私の中で終わった片思い。

最高の片思い。

だけど、この瞬間また新しくこんにちわ。

やっぱり私はあの人が好き。

さようなら。

そう僕の中で区切りをつけたあの片想いはもういい思い出。

だけど、あの日にまた違う想いが渦巻いた。

あの声、あの感触。

顔も名前も理解していないのに、なぜか気になったその人のこと。

その瞬間から今までにない、幸せな片想いが始まった。

そして、今。

気になるあの人を見て、胸がうずく。

想うだけで、考えるだけで幸せになる片想い。

これは最高の片想い。

みんなとわかれて、一人帰り道を歩く。

すると偶然にも向かいからあの人が歩いてくる。

思わず立ち止まって見つめ合う。

心の中でうずく気持ちを感じながら、微笑んだ。

そして、ちよじなる。

最高の片想い。

私と僕（後書き）

ちよつと書いてみたかったしんみり片想い小説です。
最後はどうなったかはご想像にお任せいたします。
では、できれば感想評価いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5250c/>

最高の片想い

2010年11月5日06時59分発行